

「あの猫、何時も一人だよ」

「そりゃそうだよ。あの子は私達と違うもん」

「なんでも、怨霊と話せるとか」

「何時もあの子の周りには怨霊がいるね」

「あの怨霊は、あの子が殺したつて噂だよ」

「寧ろ、あの子自身が猫の姿をした怨霊なのかも」

「あの子には近付かないほうがいいよ」

「殺されちゃうかもしれないよ」

S

……ああ、今日も私を罵倒する声が聞こえる。

毎日毎日毎日毎日、私が外に出る度聞こえてくる。

よくも飽きないものだ。そんな下らないことに時間を潰せるなんて、よっぽど暇なんだろうか。

ああ、確かに私は怨霊と会話が出来た猫。あんた達とは違う存在かもしれないね。

もうそんな下らぬ罵倒は聞き飽きたよ。私はあんた

達みたいに、陰口ばかり叩いて時間を潰しているような猫とは違うんだ。あんた達の言葉なんて私には何の意味も成さない。

私は昔から怨霊と会話をする事が出来た。昔から、この地底の怨霊達と共に生きていた。この能力を持つ

が故に、誰も近寄ってこない。私は何時だって一人で生きていた。

でもまあ、それで構わない。こんな下らない連中と一緒にになるくらいならば私は、猫であつて猫でない何か、そんな存在で十分だ。

私は昔から一人で、今も一人。そしてこれからも一人なんだろう。でも、寂しいなんて感情はとうの昔に無くなつた。寂しいなんて思つて周りに頼るよりも、最初から一人で生きて、一人で勝手に死んだほうが気が楽だろうし、何より生きる事が自由だつた。今まではそう思つていた。

……本当は、ずっとそう思い続けるはずだつたんだろうけど……。

S

ある日の事だつた。私はふらりと住処を離れ、食糧確保のついでに適当に散歩していた。私の住んでいる地獄は、熱いからか生きている者が少ない。私達のような元々灼熱地獄に住む者や、或いは怨霊くらいなものだつた。怨霊は生きてないか。まあ、私も生きるためには何かを食べなくてははいけないが、食べる物を得

るにはこの灼熱地獄を離れなければならないのだ。

私がふらふらと灼熱地獄を歩いていると、二匹の猫が何やら騒いでいるのを見つけた。そしてその二匹の間には、一匹の鴉がいる。

地獄鴉だろうか。こんなところで迷い込んできて、ご苦労な事だ。この辺りには怨霊とあんたを食う猫しか住んでいないというのに。わざわざ餌になるために来るとは物好きだな。そして永久にさようなら。

そう思つて、私は見て見ぬふりをして立ち去ろうと思つたのだが……。

—— 助けて ——

私の足が止まる……。

—— 助けて、死にたくないよ ——

猫の声でも、怨霊の声でもなかった。私の頭に直接響いてくるかのような、必死の叫び。

何だろう。怨霊の声を聞きすぎて幻聴まで聞こえるようになったのかな？

もう一度、私は鴉のほうを見てみる。鴉を食べようと襲いかかる二匹の猫と、必死に抵抗を続ける鴉。

……その鴉の姿は、本当に生きる事に必死だった。仕方ないな。幻聴かどうかは知らないけれど、聞こえてしまったからには放っておきたくもなかった。

「おい、あんた達」

私が声を掛けると、二匹の猫は同時に動きを止める。

「ひっ！」

「お、怨霊猫!？」

そして私を見るなり、慌てて立ち去って行った。

こんな反応にはもう慣れてる。こう反応する事が解つていて、私は声を掛けたのだが。

まあ、目的を果たしたのだからそれでいいか。

「おい、その鴉」

猫の言葉が通じるかは判らないけれど、それでも言う事だけは言っておこう。

「助けてやっただから早く帰るな。命は粗末にするもんじゃないよ」

右の前足で、灼熱地獄の外を指す。さっさと帰れという私なりの表現のつもりだった。どうせ言葉は通じてないだろうし。